大学ラクロスプレーヤーの性格特性研究

A study about the character of college lacrosse players

1K08A110-5　佐藤康介

指導教員　内田　直　先生　　副査　石井　昌幸　先生

目的

集団スポーツのようにポジションが決められている種目では、ポジション別に性格特性があると言われている。選手のポジションを決める際には、各ポジションに必要な身体的特性以外に、それらのポジションに望まれる性格特性も１つの重要な因子とされている。特にラクロスは、ポジション毎に役割が異なり、それぞれに適したクロスを用いる、特徴的なスポーツである。しかし、ラクロスにおける性格特性に関する先行研究はほぼ無い。本研究では、大学ラクロスプレーヤーの性格特性を、ポジション、レベル、学年の観点から比較調査することとした。

方法

対象は、関東大学ラクロス１部リーグの早稲田大学チームの部員83名である。それぞれの学年の人数は、1年生30名、2年生15名、3年生19名、4年生19名である。ポジションは、攻撃（AT・MF）48名、守備（MF・DF・G）35名であり、レベルはA・27名、B・27、C・29名である。本研究においてはMF39名を攻撃的な選手と守備的な選手とに分けた。また、早稲田大学は部内で練習を行う際に、各ポジションの選手を総合的な能力順にA、B、Cの３チームに分けて行っているため、それをレベルとして適用した。性格特性の調査には、矢田部・ギルフォード性格検査（YG 性格検査）を用い、ポジション（AT、MF、DF、Gの４ポジションと攻撃と守備の２ポジション）と、競技レベル（A,B,C)、学年（3,4年生と1,2年生）の面から比較した。また、攻撃と守備の比較においては、全部員だけでなく、上級生(3,4年生)の部員のみを対象にしても比較をした。検査項目は、①性格類型（A：平均型、B：不安定積極型、C：安定消極型、D:安定積極型、E：不安定消極型）および、②性格因子（D：抑うつ性、C：気分の変化、I：劣等感、N：神経質、O：主観的、Co：非協調的、Ag：攻撃的、G：活動的、R：のんきさ、T：思考的外向、A：支配性、S：社会的外向）である。

ポジションおよびレベル間の比較では、それぞれ二元配置分散分析を用いて統計学的検定を行い、いずれも有意水準5%をもって有意差ありとした。

結果

①　性格類型

チーム全体では安定積極型のD型が多く、不安定消極型のE型が少なかった。レベルAはE型がいなかった。攻撃は守備に比べ、A型の割合が大きく、C型の割合が少なかった。

②　性格因子

上級生(3,4年生)は下級生(1,2年生)に比べ、D:抑うつ性、I:劣等感、N:神経質、O:主観的の４つの因子が有意に低かった。攻撃は守備に比べ、Co:非協調的の因子が有意に低かった（上級生のみ)。

考察

①　チーム全体

D 型は、競技レベルの高い選手に多いとされている。今回対象にしたチームは、近年、優秀な成績を残しており、関東学生リーグ戦や全日本学生選手権、新人戦において優勝経験を持つ選手が多数を占めるため、D型の選手の割合が多くみられたと考えられた。

②　レベル間の比較

レベルAにおいて不安定・消極型のE型がいなかったのは、常に安定した実力を発揮していないとトップチーム（レベル A）に残ることはできないこと、大舞台でも積極的なプレーで自分の実力を発揮することが求められるためであると考えられた。

③　攻撃・守備（3,4年生）間の比較

攻撃にA型が多いのは冷静に相手を分析し、それに対し的確な戦術・技術を選択することが求めれられるため、平均的な性格特徴の割合が高いからだと考えられた。また、攻撃陣全員が連動し、戦術を柔軟に変化させなければならないため、守備よりも協調性が高い結果になったと考えられた。

④　学年間の比較

下級生は、同じレベルのチームで練習する上級生から、ミスを叱咤されるため思い切りプレーをしにくい。また、技術が未熟なために、周囲の状況を考えながらプレーすることが苦手である。これらが要因となって、上級生は下級生に比べ、D:抑うつ性、I:劣等感、N:神経質、O:主観的の４つの因子が有意に低かったと考えられた。